心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ㉘

※チラシは偶数月の第一日曜日に皆様におとどけしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

この親にしてこの子あり

姉の代わりに姪を塾に迎えに行った時のことです。出てきた姪からバッグを受け取った途端、肩が抜けるのではないかと思うほどの重さに驚きました。そのことを姉に話したところ、何ともほほ笑ましい話が聞けました。

毎週末、姪と甥が通っている塾での出来事です。自宅を出る時の天気予報では、その日は降水確率０％でした。ところが急に雨が降り出し、子どもを迎えに来ていた保護者たちの多くは傘がなくて困っていたそうです。時を同じくしてレッスンの終わりを告げるチャイムが鳴り、子どもたちが次々と玄関に出てきました。

姉も傘の持ち合わせがなく、どうしようかと思案していたそうです。姉のそんな気持ちを察することもなく、姪は「ちょっと待って」と友達の母親に駆け寄り、「どうぞお使いください」とバッグから折り畳みの傘を出して、手渡しました。友達の母親は「S子ちゃんが困るんじゃないの？」との問いかけに、姪はもう一本の傘を出して「大丈夫です。私のもあります」というようなやりとりがあったとのこと。

傘を渡された親御さんは、「傘を二本も持っているの？いいのかしら？」と申し訳なさそうに帰って行かれました。姉にしてみれば、親切なのは良いけれど、傘がないと困るのは私たちも同じなのに、なぜ家族のことを考えないで他人に貸すのかと複雑な心境になったそうです。

善いことをして上機嫌になった姪が姉の傍へ駆け寄ってきました。「帰ろう」と言う姪の手には、何と三本目の傘が握られていました。「あなた三本も傘をバッグに入れているの？」との驚いた姉の言葉を気にも留めず、すたすたと家路についたそうです。

姪がバッグを新調する時は、小柄には不似合いな大きいサイズを好んで選んでいました。その大きなバッグはいつもパンパンで、何が入っているのかと不思議でしたが、理由の一つが分かった瞬間だったというエピソードです。この時の姉の「やれやれ」という顔は今も印象に残っています。

それから後、姉がPTAのお手伝いに出かける準備をしているところに私が居合わせました。持参するエプロンにアイロンがけをしながら「忘れてくる人がいるかもしれないからねぇ」と二枚目を取り出す姉を目にして、私は思わず笑ってしまいました。

姉のバッグに対する私の印象は、漫画に出てくる四次元ポケットそのもの。大きなポリ袋やハサミ、メジャー、ポチ袋、万能薬など、あったら助かる物がいろいろ入っていることを思い出しました。姪の三本の傘は親譲りなのだと、つくづく納得した次第です。

あなたの町のアーバンホール

家庭とは、人がありのままの自分を示すことができる唯一の場所である。
アンドレ・モーロワ

家庭というところは、自分の人柄をそのまま表すことのできる、ありがたい場所ですね。

葬儀・法要・ギフト アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール『ちょっといい話』係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。